

論文

## 西ドイツにおける自主管理型保育施設「キンダーラーデン」

—68年運動後の新しい幼児保育の思想と実践に関する考察—

川崎 聡史

### はじめに

1960年代後半に世界各国で若者を中心にして盛り上がった抗議運動は、68年運動と呼ばれている<sup>1</sup>。特に西ドイツでこの運動は社会に様々な影響を与えたとされるが、中でも幼児保育に残した遺産については特筆すべきものがある。60年代末の西ドイツでは、「キンダーラーデン (Kinderladen)」と呼ばれる自治的な保育施設が登場した。この施設では、68年運動の活動家が新しい子育てと教育のコンセプトを幼児保育の分野で実践に移そうとした。活動家は、西ドイツの伝統とされた権威主義を強く批判し、より自由な生活スタイルや人間関係を求めた<sup>2</sup>。中でもキンダーラーデンでの保育は、教育観念と親子関係を開かれたものにする刺激になったと一般的には評価されている<sup>3</sup>。

キンダーラーデンの実験的活動は、1970年代から研究の対象になってきた。特に教育学者が、他の保育施設と比較しながらキンダーラーデンの意義を様々に評価してきた。キンダーラーデンを高く評価する研究は、子どもに自由を認める教育方針の重要性を指摘し、そのおかげで子どもはより強い自己肯定感、問題への対処能力、責任感を持つと結論づけている<sup>4</sup>。他方、キンダーラーデンの子どもと他の保育施設で育った子どもの間に大きな差異はないという議論もなされてきた。そもそもキンダーラーデンの理想と現実には乖離があるため、解放的な教育が目指されていても、その目標に大人の振る舞いが対応していないという分析も存在している<sup>5</sup>。

1980年には心理学者ホルスト・ニッケルらのグループが、包括的なキンダーラーデンと他の保育施設の比較研究を行った。ニッケルらは、80年代初頭のキンダーラーデンと他の保育施設の間には、制度面でも親子の態度の面でも大きな差異は見られないと結論付けた。この研究は、キンダーラーデンが目指す教育方針と他の保育施設のそれは必ずしも対立していないと指摘した<sup>6</sup>。

現在、登場から半世紀を経たキンダーラーデンは、ドイ

ツの保育制度に組み込まれており、革新的な施設としてはあまり見なされていない<sup>7</sup>。しかし、68年運動とその遺産に歴史的な関心が向けられるようになると、キンダーラーデンは改めて注目されるようになってきた。近年は、キンダーラーデンが親子個人に長期的に与えた影響を調査することで、オルタナティブな保育施設が存在が個人の規範観念と振る舞い方をどの程度多元的で自由なものにしたのかを検討する研究も登場している<sup>8</sup>。このような研究は、歴史家アクセル・シルトラが指摘する、社会と生活の全領域を民主化・近代化することが呼び掛けられた1960年代末以降の時代の一現象として<sup>9</sup>、あるいは哲学者ユルゲン・ハーバーマースが論じる西ドイツ社会の「根本的リベラル化」の一側面としてキンダーラーデンを理解しようとしていると言えらる<sup>10</sup>。

しかし、このような評価はキンダーラーデンの側面だけに注目したものである。キンダーラーデンが西ドイツの子育てのあり方を多元的なものにしたとしても、その展開は単線的なものではなかった。例えば、歴史家デートレフ・ジークフリートは、1960年代後半からの左翼オルタナティブ運動にはパラドックスが存在したと指摘している。彼によると、67～77年の「赤い10年間」に活動した一部の活動家は、「リベラル化」をリベラルでも多元的でもない急進的な方法で実行していた<sup>11</sup>。さらに活動家は、家庭や教会や地域共同体のような伝統的な社会関係からの個人の解放を推し進めたものの、同時に私的な問題を政治化したために、新たな運動組織の秩序によって参加者の私生活が拘束されるようになったとジークフリートは論じている<sup>12</sup>。

ジークフリートの指摘は、キンダーラーデンにも当てはまる。しかし、これまでの研究ではキンダーラーデンのリベラルな性質が強調されるばかりで、特に草創期の急進性に焦点が当てられることはほとんどない。そのため本稿では、キンダーラーデン運動の急進的な性質がいかなるものだったのかを明らかにしたい。さらにリベラルでない性質

を持つキンダーラーデン運動が、なぜ幼児保育の多元化に貢献できたのかも検討する。

本稿では、フランクフルト・アム・マインと西ベルリンのキンダーラーデンに注目する。フランクフルトの施設は、最も早い時期に登場したキンダーラーデンであり、精神分析の知見を急進的に実践しようとした。西ベルリンはキンダーラーデンに刺激を与えた新しい保育運動が最初に登場した都市であるとともに、現地の活動家はキンダーラーデンを社会主義革命集団として組織しようとしていた。1960年代末から70年代前半に多くのキンダーラーデンは精神分析の知見の実践や社会主義運動を試みていたため、両都市の施設は当時のキンダーラーデンの典型と言える<sup>13</sup>。

本稿では、ベルリンの議会外反対派文書館(APO-Archiv)で収集した史料、当時の活動家が様々な形で出版した文献、メディアによる報道を参照して、二都市の誕生直後のキンダーラーデンについて検討する<sup>14</sup>。本稿では、まずキンダーラーデン登場の背景を簡単に説明する。次に、フランクフルトと西ベルリンにおけるキンダーラーデンの教育思想と実践を分析する。その後、両都市の運動に対する反応を検討し、草創期のキンダーラーデンの性格について考察する。

## 1 キンダーラーデン登場の背景

キンダーラーデンは西ドイツにおける幼児保育の現状を批判し、オルタナティブを提案する施設として設置された。ベビーブームと女性の社会進出によって保育施設に入りたがる子どもの数が増加したこと、および保育士と設備の不足などによって、1960年代までに保育施設的环境は一般的に悪化していた<sup>15</sup>。狭い施設に押し込められた子どもは、個性をほとんど配慮してもらえず、少数の保育士によって一方的に命令を下されることがあった。このような状況は、子どもの教育にとって悪影響であると批判されていた<sup>16</sup>。

加えて子どもの置かれた環境が悪化している原因は、西ドイツの伝統とされた規律と懲罰と服従を重んじる権威主義的な教育理念にもあると考えられていた。この指摘は、ナチズムとファシズムをドイツで復活させてはならないという問題意識にも関係していた。1966年に哲学者テオドーア・アドルノは、講演「アウシュヴィッツ以後の教育」を行い、教育における権威主義について警告した。講演の中で彼は、ファシズム克服のために幼児期から規律を重んじる教育を批判した<sup>17</sup>。アドルノは、「アウシュヴィッツの原理に対抗できる唯一の真の力」として「自律」、「反省と自己決定の力、同調しない力」を挙げた<sup>18</sup>。

これらは68年運動の反権威主義的な活動家が求めていた

ものでもあった<sup>19</sup>。伝統的な権威と社会関係から個人を解放し、自己決定を促すことを目指した活動家は、子どもも生活について自ら決められるようになることを求めた。活動家は保育施設で子どもが一方的に受ける教育を、将来の生活と労働で受ける抑圧のための準備であると批判していた。この準備によって子どもは、服従の重要性を意識に植え付けられ、思考と行動の能力を奪われていると活動家は見ていた<sup>20</sup>。例えば、1969年にキンダーラーデン活動家の教育学者モニカ・ザイファートは、教育現場で「子どもは大人としてコンピュータを正しく使えるようになることを求められ、自分がしていることの意味を問うことは求められない」と非難した<sup>21</sup>。同じくキンダーラーデン活動家の社会学者ルッツ・フォン・ヴェーダーは、「権威主義的な人格を変革するために、資本主義的労働に順応しない教育を行い、自発的に考える力を子どもに身につけさせることが必要」と主張していた<sup>22</sup>。

加えて68年運動の活動家は、自らが育った家庭生活にも反発した。中でも活動家は、家庭における親の権威に批判的だった。ナチズムに順応した経験を持つ年配世代は、活動家にとって教育上の模範になり得なかった<sup>23</sup>。さらに両親は権威を用いて子どもを教育することで、社会に順応する心理的な準備をさせると活動家は考えていた。子どもは、行儀良さや清潔さを教育されることで規範観念を植え付けられ、自らの考えを主張することよりも規律を守ることを優先するようになると見られていた<sup>24</sup>。これは子どもを従順な人格へと洗脳すると活動家は主張した<sup>25</sup>。さらに閉鎖的な「ブルジョア家庭」内の生活は、自律からは最も遠いものであるとされた。精神分析の知見を参照した活動家は、父・母・子どもの三角関係からなる「ブルジョア家庭」を批判した<sup>26</sup>。「ブルジョア家庭」内で母親と子どもは権威を持つ父親に服従し、父親によって抑圧された母親は不満を子どもに対して発散し、子どもは非常に抑圧された状態で生活せざるを得ないと活動家は考えていた<sup>27</sup>。「ブルジョア家庭」の生活において性的な事柄と権威に対する問題提起はタブーにされ、ジェンダー規範に基づく男女の役割分担を守ることと、親子関係の伝統的な秩序を無批判に維持することが求められているとザイファートのような活動家は論じた<sup>28</sup>。このような家庭で育った人物は、他者にも義務を果たすことと規律と秩序を守ることを当然のように要求するという点で潜在的に攻撃的だとされた。この攻撃性は、最終的に「ナチ独裁とジェノサイドの社会心理的な基盤になった」と見られていた<sup>29</sup>。

このような問題意識から活動家は、子どもの自律的な行動能力を高めることと、排他的な家庭教育を乗り越えることを目指していた。そのために彼らは、子どもを「ブルジョア家庭」においてではなく、キンダーラーデンにおいて教育することを求めた<sup>30</sup>。

## 2 フランクフルトにおけるキンダーラーデン

### 2-1 キンダーラーデンの誕生とモニカ・ザイファートの教育思想

最初のキンダーラーデンは、1967年9月にフランクフルト・アム・マインでザイファートが5歳以下の子ども5人を集めて設立した施設であるとされる。ここでザイファートは、68年運動の反権威主義思想と性的解放の思想に影響を受けた教育を行った。彼女は、心理学者アレクサンダー・ミッチャーリヒの娘で、社会主義ドイツ学生同盟（SDS以下、SDSと略記）の連邦幹部会メンバーだった<sup>31</sup>。彼女はアドルノの教え子であり、家庭における権威主義の問題についてアドルノ、マックス・ホルクハイマー、エーリヒ・フロムらを手がかりに研究した<sup>32</sup>。

ザイファートは、1960年に政治学者ユルゲン・ザイファートと結婚し、64年に娘のアナを産んだ。西ドイツの保育の状況を憂慮し、娘のために「抑圧のない」教育を求めているザイファートは、設立したキンダーラーデンを67年12月にフランクフルト・フリー・スクールに発展させた<sup>33</sup>。68年4月に彼女は、エッシャースハイマー・ラント通りの建物に移動し、保育士一人につき5～8人の子どもを担当させることで個人の要求と個性にきめ細やかに配慮することを目指す教育を始めた<sup>34</sup>。

ザイファートは、フランクフルト・フリー・スクールでの教育構想を、ホルクハイマーの影響を受けて反権威主義教育と名付け、三つの原則によって説明した<sup>35</sup>。

反権威主義教育の最初の原則によると、子どもは自由に要求を表明しながら自らを制御することができることとされた。ザイファート曰く、西ドイツの教育は子どもの要求を抑えることに重点を置いていた。彼女は、子どもが求めるものを与えることは社会の資源量が限定されているために不可能であると一般的に考えられていると述べた。そのため教育の原理は、子どもの要求を認めることではなく、それを抑圧することになっていると彼女は指摘した。ザイファートはこの教育を拒否し、子どもは自律した人格であり、自らの要求を現実とすり合わせながら実現できると論じた<sup>36</sup>。

こうした教育思想をザイファートは、アレクサンダー・S・ニールの教育実験に刺激を受けて展開した。ニールは、1883年にスコットランドで生まれた教育者であり、サマーヒル・スクールによって知られていた。サマーヒル・スクールは、1921年にドレスデン近郊で設立され、現在はイギリスで存続している教育施設である<sup>37</sup>。ニールは、5～17歳の子ども100人あまりを集めて実験的な教育を行った。子どもは生まれながら善良で学ぶ意志を持つため、個人の能力を開花させるには、生活を自分で決める自由を認める教育が有効であると彼は考えていた。強制と圧力による教

育は子どもを自己疎外に至らせるが、代わりに自由な行動を認める教育方法なら子どもの創造性を養えるとニールは主張した。それゆえサマーヒル・スクールの生徒は、広範な自己決定を認められた。授業参加は生徒の自由意志に委ねられ、宿題や点数評価が存在しなかった<sup>38</sup>。校則は毎週の生徒総会で議論され、必要なら修正された。他方、共同生活が重視されたため、生徒は校則を遵守することが必要だった<sup>39</sup>。

ニールの学校は、第一次世界大戦後に伝統の社会的拘束力が緩んだドイツで行われた多くの教育実験のひとつだった。彼の試みが1920年代には大きな注目を集めることはなく、ドレスデン近郊の学校は資金難ですぐにオーストリアへと移転した。ニールは自らの教育に関する報告を60年に英語で、65年にドイツ語で出版し、この本は69年にドイツ語の新装版が発売されて、西ドイツで約60万部を売り上げた<sup>40</sup>。ニールによる子どもの自律性を尊重する教育理念は、権威主義的な教育に対するオルタナティヴを求めている60～70年代の若い左翼活動家に好意的に受け入れられた<sup>41</sup>。

ザイファートは、ニールの教育実践を学ぶために、1966年冬学期にイギリスに滞在した。帰国したザイファートは、ニールの理論に依拠してフランクフルト・フリー・スクールにおける教育思想を編み出したと語っている<sup>42</sup>。

反権威主義教育の第二の原則は、子どもは機能主義的に、恐れと罪悪感を持たずに必要なことを要求できるようになるべきというものだった。必要なものを要求する際に、子どもは大人の反応に不安を感じるべきではないとされた。ザイファートによると、伝統的に教育とは大人が権威主義的に子どもに報酬を与えたり、罰したりすることであるとされてきた。この教育は、大人の権威と承認にすがりつつ不安を感じながら行動するように子どもを仕向け、自律性を奪うと彼女は主張した。その代わりに、子どもの行動原理は大人への不安に基づくものではなく、機能主義的なものであるべきだと彼女は論じた。例えば、子どもが喧嘩を止める理由は、大人に褒められたり怒られたりしないようにするためではなく、喧嘩する限り誰も遊べないことを理解したからでなければならないとザイファートは考えた。子どもは、叱責を恐れて大人に対して神経質になるべきではなく、共同体の対等な構成員として他人の顔色を伺うことなく自律して必要なことを要求するべきだとされた<sup>43</sup>。

ザイファートは、性的な要求も子どもは抵抗を感じずに主張するべきであると強調した。こうした考えをザイファートは、ヴィルヘルム・ライヒの研究から得ていた。フロイトの弟子のライヒは、1920～30年代に活動した精神科医である<sup>44</sup>。彼は、家父長的社会で行われるセクシャリティの抑圧は、精神的な病と権威主義的人格の原因であると見ていた。彼は、性的欲求を規範によって抑圧するの

はなく、自ら制御しつつ積極的に充足することで、権威主義的でない解放的な人格を生み出すことを求めていた<sup>45</sup>。

ライヒの精神分析の理論はヴァイマル期には異端だったが、68年運動の「性革命」やニールを含む様々な教育者に影響を与えた<sup>46</sup>。ザイファートは、彼の理論を積極的にキンダーラーデンで実践しようと試みた。彼女は、社会が「性的な事柄や快楽に対して根本的に敵対的」で、大人が「セクシャリティに対して機能不全な関係」を持っているせいで、本来は多様なはずの子どものセクシャリティが抑圧されて、規範に順応する権威主義的人格に子どもが育っていると考えていた<sup>47</sup>。そのため彼女は、子どもの性的な行動を容認し、ジェンダー規範を排除することで権威から自律した人格を育てようとした<sup>48</sup>。

反権威主義教育の第三の原則は、学びは子どもの問いから出発するべきであるというものだった<sup>49</sup>。子どもは保育士と大人から一方的に教育されることで、社会に順応する人物に育てられるべきではないとされた。大人は子どもが旺盛な知識欲を持つことを認識し、多様な刺激を与えて学ぶ意欲を伸ばすべきだとザイファートは論じた。彼女は、大人が子どもに全く関わらない自由放任主義的な教育も否定した<sup>50</sup>。

ザイファートは、大人が決めた計画に沿って教育することを避け、子どもが学習内容を決定できるあり方を目指した。その理由として、資本主義的な生産様式が個人の要求を無視して労働を強制する問題点を彼女は指摘した。子どもは、自由意志を無視したカリキュラムを学校で受け入れる経験をする中で、疎外された資本主義的な労働に順応する準備をさせられると彼女は考えていた。代わりにザイファートは、子どもの意向を尊重した教育を行う重要性を強調した。もし子どもが読書をしたがらなければ、保育士はそのことを理解して話し合っただけで学習内容を変更すべきとされた<sup>51</sup>。

## 2-2 ザイファートの教育に対する反応

全体としてザイファートの教育は、既存の教育に対するオルタナティブとして見られ、外部から比較的肯定的な評価を受けた。1969年12月1日夜にドイツ公共放送局連盟(ARD)が、キンダーラーデンの特集番組『不服従のための教育』を放映した。北ドイツ放送(NDR)の監督ゲアハルト・ポットが制作したこの番組で、ザイファートのキンダーラーデンは比較的肯定的に扱われた。インタビューを通じてポットは、彼女の方針には将来の新しい教育の方向性を示す要素があるとした<sup>52</sup>。

ポットの番組を通じてキンダーラーデンは、他のメディアからも評価された。ポットの報告によると、全国で21の新聞と雑誌が番組について報道した<sup>53</sup>。特に日刊紙『ハンブルガー・アーベントブラット』は、キンダーラーデンを

「若者による歓迎するべきイニシアティブ」として報じた<sup>54</sup>。『デア・シュピーゲル』誌は、西ドイツの幼児保育が抱える問題への対応としてキンダーラーデンを評価した<sup>55</sup>。

ザイファートの教育方法は参加者からも基本的に支持を得ていたものの、大人の振る舞いを徹底的に見直し、キンダーラーデンの基準に従って行動することを求めたため、親たちの間に抵抗が存在した<sup>56</sup>。大人が内面化している権威主義的な教育観念を捨てて、子どもに自ら考えて行動を決める機会を与えることをザイファートは親たちに要求した。例えば、もし子どもが冬にセーターを着ることを嫌がるなら、大人は着用を権威によって強制するのではなく、子どもが風邪を引くかもしれないという現実を自ら経験し、その上でセーターの必要性を自分で理解すべきだとされた。このように子どもが自発的に学ぶまで大人が辛抱強く待つことは、子どもが自律した人格に成長する前提だとザイファートは論じた。しかし、子どもに自分の要求が実現できるかをいちいち試させることは、時間がかかることから親たちを苛立たせたり、不安がらせたりすることもあった<sup>57</sup>。

さらに子どもへの性教育は、親たちの間で抵抗を生んだ<sup>58</sup>。子どもの性的要求を大人が無視することは子どもの性的抑圧につながるため、子育てを通じて大人も自他のセクシャリティによく向き合うべきであるとザイファートは主張した。大人がキンダーラーデンにおける子育てを通じて、自らのセクシャリティ観念を相対化することをザイファートは求めた<sup>59</sup>。しかし、参加者のヴィルマ・アデン＝グロスマンの回想によると、このような要求は親たちを戸惑わせるとともに、大人がどの程度自らのセクシャリティに向き合うべきか、および子どもの性的行動をどこまで認めるべきかについて参加者の間で意見対立があった<sup>60</sup>。特に子どもの性的な関心が大人に向いた場合、親たちは非常に不安になったため、ザイファートは参加者と性教育の目的について議論することを迫られた<sup>61</sup>。

加えてザイファートの教育思想は優れていても、理想と現実のギャップはなかなか埋まっていなかったという参加者の不満も記録されている。ほとんどの親はザイファートほど教育に高い意欲を持つわけではないため、両親の協力には限度があり、大人の行動の見直しは不十分だったとされる。さらにキンダーラーデンでザイファートの思想を実践する余裕があまりないことも参加者の不満の種だった。1969年2月時点でフランクフルト・フリー・スクールには20人ほどの子どもが通っていたが、この人数が自由に活動するには建物が狭すぎるという意見も見られた。また参加者の教育的理解にも温度差があった。子どもが何か遊びを始めようとする、大人は安全性や時間といった様々な理由で口を出すことが多かった。こうした介入は、いずれに

せよ子どもにとっては規律であるという意見が参加者から出され、活発に議論された<sup>62</sup>。

### 3 西ベルリンにおけるキンダーラーデン

#### 3-1 コミューンIIからキンダーラーデンへ

キンダーラーデンは、ザイファートのように個人の変革に重点を置いた施設ばかりではなかった。特に西ベルリンの活動家は、私生活と子育ての問題を政治活動と一体化させることで、社会変革を直接目指す政治組織としてキンダーラーデンを捉えていた<sup>63</sup>。このことは、政治的なものと私的なものとの境界線を無くし、人間の生活全体を新たに編成しようとしたという点で、68年運動の反権威主義的な問題意識を反映していた<sup>64</sup>。

西ベルリンで新しい幼児教育を最初に行おうとしたのは、1967年8月に設立されたコミュニンIIだった。68年運動期には市民的な生活様式を拒絶する多くの生活共同体コミュニンが結成されたが、中でもコミュニンIIはコミュニンIに次いで有名だった<sup>65</sup>。

コミュニンIとコミュニンIIは、左翼グループ「転覆活動」に近い活動家によって設立された。両グループの参加者は、1966年11月にSDSのディーター・クンツェルマンが発表した「大都市における革命的コミュニン設立についてのメモ」に賛同していた。クンツェルマンは、「ブルジョア家庭」内で個人が抑圧されることにより、自律した自我を確立できない権威主義的人格が生まれるというアドルノの分析を参照していた<sup>66</sup>。抑圧の克服のためにクンツェルマンは、結婚生活と家族構成員相互の「ブルジョア的依存関係」を廃止することを求めた。そのために中国の人民公社を参考にしたコミュニンで集団生活を行うことを彼は主張した。人民公社は大躍進政策時に毛沢東によって推進されたプロジェクトだが、これをクンツェルマンは伝統的な家庭生活を代替する反資本主義的な生活共同体として見ていた<sup>67</sup>。

クンツェルマンの主張に共感した人々は、1967年1月にコミュニンIを、同年8月にコミュニンIIを結成した。SDSのヤン＝カール・ラスペら7人の成人男女が設立したコミュニンIIは、コミュニンIよりも政治的な性格が強かった。参加者は労働、消費、余暇など生活に関わるあらゆる活動を共同で行うことで資本主義を拒絶し、社会主義者に生まれ変わることを目指していた。コミュニンIIは子どもの教育にも取り組んだ。コミュニンIIには片親しかいない3歳児と4歳児が一人ずつ参加させられていたため、この子どもたちが新しい教育の最初の対象になった<sup>68</sup>。

1968年1月には西ベルリン初のキンダーラーデンが設立された。設立を主導したのは、ヘルケ・ザンダーら女性の

学生活動家だった<sup>69</sup>。SDS活動家ザンダーのイニシアティブで「女性解放のための活動評議会（以下、活動評議会と略記）」が設立された。活動評議会とコミュニンIIの間では人的交流が多く、教育理念に共通点があったため、両グループは68年4月末から協力して子育てをするようになった<sup>70</sup>。活動評議会のキンダーラーデンでも、フランクフルトと同じく子どもに自由を認める教育が行われていた。ただ活動評議会は、フェミニストの立場から共同で子どもの世話をすることで母親の学業と職業のための時間を確保し、女性の自己実現を促すことに重点を置いていた<sup>71</sup>。

#### 3-2 社会主義的なキンダーラーデンの思想

他方、成人女性の自己実現よりも子どもの教育を通じた直接的な社会変革という目標を重視したがる活動家もいた。その一人が、ベルリン自由大学の教育学者ラインハルト・ヴォルフだった。彼は2歳の子どもを育てており、活動評議会に参加していた。1968年8月10日に彼はヴェーダーとともに「社会主義キンダーラーデン中央評議会（以下、中央評議会と略記）」を結成し、新たな幼児教育を行うためのキンダーラーデンを設立した<sup>72</sup>。

ヴォルフらの中央評議会はコミュニンIIから影響を受けて、共同生活を行う政治組織としてキンダーラーデンを理解していた。コミュニンIIは1968年夏に活動方針や生活習慣をめぐる対立で解散したが、このプロジェクトが短命に終わった理由を、子育てやジェンダーなどの私的問題を中心にし、政治運動をなおざりにしたためだと中央評議会系の作家グループは論じた<sup>73</sup>。中央評議会は、北京系のドイツ共産党・マルクス・レーニン主義（KPD/ML）を支持する参加者を抱え、フェミニズムよりも毛沢東主義による社会主義教育を重視し、活動評議会の方針を批判した<sup>74</sup>。

組織として中央評議会はザイファートと同じ問題意識を持ち、ニールや1920年代にモスクワ近郊で子どもに自由を認める教育を行ったヴェーラ・シュミットを参照し、ザイファートが行ったような反権威主義教育を高く評価していた<sup>75</sup>。他方、中央評議会はニールらの政治性の低さを批判した。中央評議会系の作家グループはニールが主張したような、外部の抑圧から自由な環境で子どもに自己決定の経験を積ませることの必要性に賛同していたものの、それだけでは不十分であると考えていた。「個人の解放を目指す教育が、階級全体を解放する社会主義運動に直接結びつかなければ、真に人間を解放することにはならない」と作家グループは論じた。このグループは、サマーヒル・スクールが社会主義的でないと、次のように批判した。ニールの教育には、「すでに中立性を賛美する危険性がある。社会主義の意識は党派性を必要とする。そして[ニールの教育は：筆者註]サマーヒルの『孤島』において作ら

れた、言葉巧みに信じ込まされた『明るい世界』に過ぎない危険がある』<sup>76</sup>。さらに中央評議会の機関紙は、サマーヒル・スクールやシュミットの保育施設に参加できる子どもが中間層以上の家庭出身であることを指摘した。その子どもは、両親の経済的余裕のおかげで元々紛争のない世界に生きているだけであり、実際に社会で生きる能力は低いと機関紙は論じた<sup>77</sup>。この問題を解決するためにキンダーラーデンは、将来的に社会の矛盾に立ち向かう政治運動を行う能力を子どもに身につけさせる教育を行わなければならないと中央評議会は海賊版書籍の中で主張した<sup>78</sup>。

全体として中央評議会は、キンダーラーデンで反権威主義教育を発展させた教育を行う必要があると考えていた。キンダーラーデンの目標は「ヴェーラ・シュミットとニールを模範として受け入れつつ、権威主義的・独占資本主義的システムに対抗して、子どもに自らの利益の急進的な擁護と実現」をさせることであり、そのためにキンダーラーデンは、「体制を攻撃できる政治教育へと移行しなければならない」とされた。この政治教育の最良の形態は「プロレタリア的教育であり、社会的支配と抑圧を社会の根本から解消できる運動と結びついた、全面的な人間の養成を現実のものにするはずである教育」だと中央評議会は全体として論じた<sup>79</sup>。

この「プロレタリア的教育」とは、どのようなものだったのだろうか。その本質は、子どもが幼いうちから「ブルジョアジー」の影響を受けることを避けるために、家庭内ではなく、資本主義社会から切り離されたキンダーラーデンのコミュン内部で、子どもを教育することだとされた<sup>80</sup>。中央評議会のキンダーラーデンでは、子どもが関わる事が社会主義的なもので置き換えられたり、社会主義思想によって解釈し直されたりした。例えば、子ども向けの話は童話ではなく、南ベトナム解放民族戦線やホー・チ・ミン、毛沢東やクンツェルマンのような左翼運動とその指導者の歴史を分かりやすくしたものであるべきだと中央評議会系の作家グループは主張した。さらに資本主義による搾取と抑圧について早い時期から子どもに教えること、および体制に対抗する訓練としてデモごっこを行うことを求めた<sup>81</sup>。加えて作家グループは、子どもが料理をすることで生産物として食事を理解し、生産活動に関するイメージを早い時期から身につけることを目指した<sup>82</sup>。

社会主義的なキンダーラーデンも子どもの性教育に取り組もうとした。セクシャリティの抑圧は、子どもにとって人間的な自由と要求の充足を妨げられる最初期の経験のひとつであり、権威主義的人格の出発点になると全体として中央評議会は考えていた<sup>83</sup>。ただ中央評議会の作家グループは、性的抑圧のメカニズムに反資本主義的な解釈を施した。このグループによると、子どもも性的要求を持っているものの、それを主張すると大人は子どもが社会化を

拒否していると理解してしまう。子どもは大人による禁止に反抗するが、教育者の圧倒的な力によって敗北し、無意識にセクシャリティと汚さを結びつけて抑圧してしまうとされた。そうして強制的に押さえ込まれた要求が昇華された結果、攻撃的な言動につながると作家グループは主張した。この攻撃性は、資本主義社会では侵略戦争と人種差別、合理化と技術的進歩につながると作家グループは論じた。このグループによると、この進歩は商品の過剰生産と飽和状態をもたらすため、資本家は市場を操作することで不要なものを購入するように消費者を誘導し、生産状況に順応させていた。こうしてさらに人間が抑圧されると作家グループは述べた<sup>84</sup>。

一般的に中央評議会は性教育をザイファートよりも直接的に政治活動に結びつけようとした。1969年4月に中央評議会の活動家は、フランクフルトで開かれたSDS代表者会議に参加し、子どもの性的解放について議論した。会議では「プロレタリア的教育の起点は、幼児期から性的・政治的タブーを打破することにある。なるべく早い時期に抑圧の社会的原因に関して子どもを啓蒙することが重要であり、抑圧の根本を子どもが適切に批判できるような活動を行う」と決議された。しかし、単に子どもに性的自由を認めることで社会的な拘束から解放することは、「ブルジョアの特権」であり、それだけで満足してはならないと中央評議会の活動家は論じた<sup>85</sup>。ヴェーダーは労働者の子どもが要求を自由に表明しても、生産過程での搾取と抑圧に対抗する準備をしなければ意味がないと訴えた<sup>86</sup>。

### 3-3 社会主義的な教育に対する反応

中央評議会のキンダーラーデンは、政治運動を直接志向したことから、ザイファートの施設よりも多くの要求を参加者に出したため、キンダーラーデン内外からしばしば強い反発を受けた。

中央評議会のキンダーラーデンは、ザイファートの施設よりも大きな注目と批判をマスメディアから受けていた。1969年12月のポットによる番組では、西ベルリンのキンダーラーデンも取り上げられた。ポットは、中央評議会のキンダーラーデンをザイファートの施設と同じように幼児保育の状況悪化に対する市民の自発的な対応として扱ったものの、次のように批判した。「カトリックの幼稚園の子どもが聖書の語句を学び祈ることを促されているように、4歳児が恭しく『毛沢東語録』を暗唱できるようにならない限りならぬキンダーラーデンもいくつか存在する。両方の場合で洗脳が行われている。つまり子どもは、無批判に教育者のイデオロギーを受け入れることを強制されている」<sup>87</sup>。

加えて中央評議会のキンダーラーデンは、様々な新聞と雑誌によって報道された。特に1969年2月の『シュテル

ン』誌の記事「ドイツで最もわんぱくな子どもたち」は、中央評議会に衝撃を与えた。この記事はキンダーラーデンで子ども同士の性的な嫌がらせが横行していると主張した<sup>88</sup>。記事は西ベルリン市政府にも衝撃を与え、既に進んでいたキンダーラーデンへの資金援助に関する交渉に悪影響を及ぼした<sup>89</sup>。中央評議会は、弁護士のホルスト・マラーとオットー・シリーを通じて『シュテルン』誌に損害賠償を請求することを検討した<sup>90</sup>。最終的に2月26日に中央評議会は、編集部に押しかけて抗議したが、そのせいでかえって様々なメディアが、キンダーラーデンを批判的に報道した<sup>91</sup>。

中央評議会のキンダーラーデンでは参加者の合意形成に基づいた運営が目指されていた。毎週の会合で活動家と親は、施設の立地や内装、資金調達の方法、機関紙の編集などについて積極的に議論していた<sup>92</sup>。ヴォルフら活動家は、定期的に行政との交渉や政治運動の経過を詳細に報告し、活動への協力を親に求めていた<sup>93</sup>。

活動家と親の距離が近いことで、しばしばキンダーラーデンは親の私生活へと強く介入した。コミュニオンIIに影響を受けていた中央評議会は、キンダーラーデンは単なる保育施設ではなく、親を政治的に教育する場でもあるべきだと主張した<sup>94</sup>。ヴォルフとヴェーダーは、大卒者が多いキンダーラーデン参加者に「ブルジョア的」価値観を克服し、「新しい人間」へと生まれ変わることを求めた<sup>95</sup>。そのために二人は、労働者地区にキンダーラーデンを設置し、参加者が労働者の親子と触れ合うことが重要だと考えていた<sup>96</sup>。その結果、参加者の反対を押し切って、キンダーラーデンは西ベルリンのシェーネベルク地区からクロイツベルク地区フィヒテ通り15番地に移転された<sup>97</sup>。

さらに中央評議会は、親に「正しい革命的な職業」に就くことを求めた。親が現在の仕事を辞めて工場で労働者とともに働き、そこで「工場キンダーラーデン」を設立することと、学生は学術研究をやめて教育学を専攻し、教員として義務教育課程で働くことで体制内部から社会を変革することを中央評議会は要求していた<sup>98</sup>。

参加者の生活に配慮していなかったヴォルフらの政治的要求は強い反発を受けた。施設の移転と参加者の職業をめぐる対立の過程で、一部の参加者がキンダーラーデンを抜けて別の施設に子どもを預けることを選び、組織は分裂した<sup>99</sup>。これによってキンダーラーデン自体の解散が議論になったものの、保育施設自体は必要だったため、実際に廃止されることはなかった。代わりに両親の会合は1971年から週一回から週二回に増やされ、参加者は運営方針についてよく話し合うことになった。活動家は親からの批判に応じて、新たにやってくる参加者に政治信条に関する特別な要求を出さないことに合意した。親が広く参加する会合では、毎日の運営に関する議論が主になり、政治的な教育コ

ンセプトについての話し合いは進まなかった。このことに関して中央評議会系の作家グループは、親たちに不満を持ち続けた<sup>100</sup>。活動家の当初の意図とは異なり、70年代半ばまでに多くのキンダーラーデンは政治的性格を弱めていった<sup>101</sup>。

## おわりに

キンダーラーデンは、1967～68年に若い左翼活動家によって設立された自治的な保育施設だった。キンダーラーデン運動は、60～70年代の西ドイツにおける保育施設の不足問題を解決するための市民による自発的な試みであると同時に、従来の権威主義的な教育へのオルタナティブを提案する活動でもあった。

68年運動の活動家は、規律と秩序への服従を子どもに求める教育を批判し、それに代わるものとして反権威主義教育を主張した。特にフランクフルトのザイファートは、フランクフルト学派やライヒ、ニールなどに影響を受けて反権威主義教育を体系化しようとした。反権威主義教育は、広範な行動の自由を認めることで、子どもを権威に単に服従しない、自律した自己決定ができるような人格に育てることを目指した。

他方、西ベルリンの運動はより強く政治活動を志向した。西ベルリンで反権威主義教育を最初に掲げたコミュニオンIIは、私生活と政治運動を一体化しようと試み、共同生活を通じて参加者を積極的な社会主義者にするを目指していた。コミュニオンIIに影響を受けたのが、社会主義キンダーラーデン中央評議会だった。中央評議会は反権威主義教育を支持しつつ、その政治的な中立性を批判し、毛沢東主義的な教育を行うことを目指した。中央評議会は、新しい教育と資本主義社会の転覆は一体であるとみなし、個人の変革を社会の変革に直接結びつけようとしていた。さらに中央評議会は、子どもだけでなく大人も政治教育を受け、社会主義者に生まれ変わることを求めた。

フランクフルトと西ベルリンのキンダーラーデンは、運動内外から様々な反応を受けた。ザイファートの教育方針は、キンダーラーデン内外で比較的評価され、西ドイツで支配的な教育観念へのオルタナティブとして一部のマスメディアからも認められていた。ただし、参加者に教育と生活に関する観念の徹底的な見直しを求めていたため、キンダーラーデン内部でザイファートの教育方針はしばしば反発を受けた。中央評議会のキンダーラーデンは、マスメディアから批判的に報道されていた。報道に中央評議会の活動家は時に実力で抗議した。加えて中央評議会は政治的要求を優先したため、ザイファートよりも強く親の生活に介入して参加者の分裂を招いた。

全体としてキンダーラーデンの教育思想は、西ドイツで

支配的な教育観念に対する明白なオルタナティブだったと評価できよう。キンダーラーデンは規律と秩序を重視する旧来の教育に対して別のあり方を提示しようとした。キンダーラーデンは規模こそ小さかったものの、ユニークな教育を行うことでマスメディアに取り上げられて保育のあり方のひとつとして認知された。キンダーラーデンは独自の急進的な教育を実施し、公共空間で認知されることで、西ドイツの幼児保育を多元化することに貢献したと評価できる。

同時にキンダーラーデンは、西ドイツ社会で一般に求められたものとは別の規律と秩序を参加者に守らせようとしていたことも指摘できる。キンダーラーデン活動家は、新しい秩序を生み出すような多くの要求を出していたため、しばしば参加する親たちから反発を受けたり、彼らを困惑させたりしていた。このことから冒頭のジークフリートの指摘にあるように、キンダーラーデンは68年運動後の多くの運動と同じく、社会の「リベラル化」をリベラルでない方法で行い、参加者の私生活を強く拘束するものだったと評価できよう。

ただキンダーラーデン内の新たな秩序は、活動家が一方的に決めて無条件に遵守することを参加者に求めるようなものではなかった。活動家は参加者の要求に向き合うことを余儀なくされたように、キンダーラーデン内には教育方針を活動家と参加する親たちが議論し、修正する機会が存在していたことも指摘できる。このことも西ドイツの幼児保育の多元化を促す要素だったと言えよう。

本稿は、キンダーラーデン運動を個別事例として取り上げて検討し、68年運動以降の左翼オルタナティブ運動に関して総合的な理解を提示するものである。つまり、本稿は運動の持つ多元化作用が急進的な要素と共存していたことを指摘する。この指摘は他の左翼オルタナティブ運動にも当てはまることも想定できようが、この点の検証は今後の課題としたい。本稿のような研究の方向性は、左翼オルタナティブ運動に関してリベラル性や急進性のどちらかを強調する解釈ではなく、より多面的な理解を提供するものになろう。

<sup>1</sup> 井関正久『ドイツを変えた68年運動』白水社 2005年 9頁。

<sup>2</sup> Doering-Manteufel, Anselm, „Westernisierung. Politisch-ideeller und gesellschaftlicher Wandel in der Bundesrepublik bis zum Ende der 60er Jahre“, in: Lammers, Karl Christian u.a. (Hg.), *Dynamische Zeiten. Die 60er Jahre in den beiden deutschen Gesellschaften*, Hamburg 2000, S. 311.

<sup>3</sup> Mauritz, Miriam, *Emanzipation in der Kinderladenbewegung. Wie das Private politisch wurde*, Frankfurt a.M. 2018, S. 181f.

<sup>4</sup> キンダーラーデンを肯定的に評価する研究事例については次の文献を参照。Dolezal, Ulrike, *Erzieherverhalten in Kinderläden*, Wiesbaden 1975; Henningsen, Franziska, *Kooperation und Wettbewerb*.

*Antiautoritäre und konventionell erzogene Kinder im Vergleich*, München 1973.

<sup>5</sup> キンダーラーデンをあまり評価しない研究事例については次の文献を参照。Bierhoff-Alfermann, Dorothee/Höcke-Pörzgen, Brigitte, *Kindererziehung aus der Sicht von Eltern zweier antiautoritärer und evangelischer Kindergärten. Eine Erkundungsstudie*, in: *Zeitschrift für Entwicklungspsychologie und Pädagogische Psychologie*, Nr. 6, 1974, S. 139-145.

<sup>6</sup> Nickel, Horst u.a., *Erzieher- und Elternverhalten im Vorschulbereich*, München 1980.

<sup>7</sup> 2004年時点でドイツの保育施設の14%は、キンダーラーデンのような親による自主管理施設だった。Staatsinstitut für Frühpädagogik (Hg.), *Forschungsprojekt Trägerqualität. Ergebnisbericht zur Bundesweiten Befragung von Rechtsträgern im System der Tageseinrichtungen für Kinder-Berichte 13/2004*, München 2004, S. 35.

<sup>8</sup> Göddertz, Nina, *Antiautoritäre Erziehung in der Kinderladenbewegung. Rekonstruktive Analysen biographischer Entwürfe von Zweigenerationen-Familien*, Dortmund 2018; Heyden, Franziska, *Die lebensgeschichtliche Bedeutung des Kinderladens. Eine biographische Studie zu frühkindlicher Pädagogik*, Rostock 2018.

<sup>9</sup> Schlidt, Axel/Schmidt, Wolfgang, Einleitung in: Schlidt, Axel/Schmidt, Wolfgang (Hg.), *„Wir wollen mehr Demokratie wagen.“ Antriebskräfte, Realität und Mythos eines Versprechens*, Bonn 2019, S. 15.

<sup>10</sup> Habermas, Jürgen, *Die nachholende Revolution*, Frankfurt a.M. 1990, S. 26.

<sup>11</sup> ここでは「リベラル化」を、社会が多元化しつつ、その多元性の価値が一般に認められるようになる現象として理解する。若い左翼活動家の運動が活発化した1967～77年の時期を指す「赤い10年間」については次の文献を参照。Koenen, Gerd, *Das rote Jahrzehnt. Unsere kleine deutsche Kulturrevolution 1967-1977*, 5. Aufl. Frankfurt a.M. 2011, S. 9.

<sup>12</sup> Siegfried, Detlef, 1968. *Protest, Revolte, Gegenkultur*, Ditzingen 2018, S. 231f.

<sup>13</sup> 1969年4月にフランクフルトで開かれた会議には、西ドイツ10都市と西ベルリンのキンダーラーデン代表者が集まり、運動の状況について議論した。この会議では精神分析の知見と社会主義運動の関係が重要な議題になった。„Frankfurter Diskussionen“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>14</sup> 草創期のキンダーラーデンは、ローカルで小規模な保育施設であるため、その活動を具体的に記録した文書館史料は少ない。史料の少なさを補うために本稿では、活動家が出版した文献も重要な史料として扱った。活動家は、運動の理念の普及とキンダーラーデンの運営資金調達のために積極的に出版活動を行なった。さらに活動家は、海賊版書籍を販売していた。これは、キンダーラーデンと反権威主義教育の先駆者とされた思想家のテキストとそれに関する活動家の議論を収録している独特の史料であり、本稿でも参照した。海賊版書籍には、書誌情報の末尾に(海)と記す。

<sup>15</sup> Reichardt, Sven, *Authentizität und Gemeinschaft. Linksalternatives Leben in den siebziger und frühen achtziger Jahren*, Berlin 2014, S. 722f.

<sup>16</sup> Seifert, Monika, Zur Theorie der antiautoritären Kindergärten, in: Seifert, Monika/Nagel, Herbert (Hg.), *Nicht für die Schule leben. Ein alternativer Schulversuch freie Schule Frankfurt*, Frankfurt a.M. 1977, S. 11.

<sup>17</sup> Adorno, Theodor W., *Erziehung zur Mündigkeit. Vorträge und*

*Gespräche mit Hellmuth Becker 1959-1969*, Frankfurt a.M. 1970, S. 94.

<sup>18</sup> Ebd., S. 97.

<sup>19</sup> ミュラー、ヤン＝ヴェルナー（板橋拓己／田口晃監訳）『試される民主主義—20世紀ヨーロッパの政治思想』下巻 岩波書店 2019年 96-97頁。

<sup>20</sup> N.N. *Berliner Kinderläden. Antiautoritäre Erziehung und sozialistischer Kampf*, Berlin 1970, S. 219f.

<sup>21</sup> Seifert, Monika, „Eine progressive Antwort. Der antiautoritäre Kindergarten“, in: *Publik*, 14. März 1969.

<sup>22</sup> Werder, Lutz von, *Von der antiautoritären zur proletarischen Erziehung*, Frankfurt a.M. 1972, S. 11f.

<sup>23</sup> Reichardt, a.a.O., S. 744.

<sup>24</sup> „3) Das pädagogische Konzept“, in: *KL-Info*, Nr. 4, 12. Febr. 1969, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger), 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>25</sup> N.N. *Berliner Kinderläden*, S. 133.

<sup>26</sup> „Von der antiautoritären Erziehung zur sozialistischen Erziehung“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>27</sup> „Kurze Darstellung über die Entwicklung des Aktionsrates der Frauen“, 00000112, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger) 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>28</sup> Seifert, Monika, „Bangemachen gilt nicht mehr“, in: *Publik*, 2. Jan. 1970.

<sup>29</sup> Reichardt, a.a.O., S. 741.

<sup>30</sup> „II. Zur Situation der Kinderläden“, in: *KL-Info*, Nr. 1, 22. Jan. 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>31</sup> SDS は、1946～70年にかけて西ドイツで活動した学生組織である。SDS は、ドイツ社会民主党（SPD）の学生組織として設立されたものの、50年代から党の方針に反抗することが増えたため、61年までに SPD から関係断絶を宣告された。その後、ルディ・ドゥチュケのような著名な学生運動指導者が参加し、SDS は影響力を強めた。しかし、68年運動の急進化と衰退に伴い、組織内で分裂傾向が高まり、70年に SDS は解散を宣言した。Fichter, Tilman, *SDS und SPD. Parteilichkeit jenseits der Partei*, Opladen 1988, S. 269.

<sup>32</sup> Aden-Grossmann, Wilma, *Der Kindergarten. Geschichte - Entwicklung - Konzepte*, Weinheim/Basel 2011, S. 143.

<sup>33</sup> Seifert, Monika, *Kinderschule Frankfurt*, in: Höltershinken, Dieter (Hg.), *Vorschulerziehung. Eine Dokumentation*, Freiburg 1971, S. 159f.

<sup>34</sup> Seifert, Monika, Kann die Kinderladenbewegung einen allgemeingütigen Beitrag zur Frage von Möglichkeiten kindlicher Autonomie leisten?, in: Seifert/Nagel (Hg.), a.a.O., S. 36;

<sup>35</sup> Horkheimer, Max, *Studien über Autorität und Familie. Forschungsberichte aus dem Institut für Sozialforschung. Schriften des Instituts für Sozialforschung*, Bd. 5., Paris 1936, S. 197; Seifert, *Kinderschule Frankfurt*, S. 163-167.

<sup>36</sup> Seifert, Zur Theorie der antiautoritären Kindergärten, S. 18.

<sup>37</sup> Neill, Alexander Sutherland, *Theorie und Praxis der antiautoritären Erziehung. Das Beispiel Summerhill*, Reinbek bei Hamburg 1969, S. 4.

<sup>38</sup> Ebd., S. 30f.

<sup>39</sup> Kraushaar, Wolfgang, *Achtundsechzig. Eine Bilanz*, Berlin 2008, S. 139ff.

<sup>40</sup> „Neill als Erzieher Schwierigkeiten mit der sexuellen Freiheit“, in: *Die Zeit*, Nr. 2, 8. Jan. 1971.

<sup>41</sup> Kraushaar, a.a.O., S. 140.

<sup>42</sup> Seifert, *Kinderschule Frankfurt*, S. 159.

<sup>43</sup> Seifert, Zur Theorie der antiautoritären Kindergärten, S. 13.

<sup>44</sup> ライヒの思想については次の文献も参照。水戸部由枝「My Revolution—六〇～七〇年代の西ドイツ社会国家に見る「性の解放」」『ゲシヒテ』第4号 2011年3月 9頁。

<sup>45</sup> Reich, Wilhelm, *Der Einbruch der sexuellen Zwangsmoral. Zur Geschichte der sexuellen Ökonomie*, Frankfurt a.M. 1975, S. 24.

<sup>46</sup> ニールは、1937年にスカンディナヴィア諸国を講演旅行中、ナチ・ドイツから亡命していたライヒに出会った。その後、ニールはライヒに影響を受けて子どもの性的解放にも取り組むようになった。Reich, Wilhelm, *Der Einbruch der Sexualmoral*, Kopenhagen 1935, S. 6; Reichardt, a.a.O., S. 764; Werder, Lutz von, *Kinderladenbewegung und politische Psychoanalyse*, in: Bock, Karin u.a. (Hg.), *Zugänge zur Kinderladenbewegung*, Wiesbaden 2019, S. 49f.

<sup>47</sup> Seifert, *Kinderschule Frankfurt*, S. 167ff.

<sup>48</sup> Seifert, Zur Theorie der antiautoritären Kindergärten, S. 24f.

<sup>49</sup> Ebd., S. 13.

<sup>50</sup> Ebd., S. 18f.

<sup>51</sup> Seifert, Kann die Kinderladenbewegung, S. 32.

<sup>52</sup> Bott, Gerhart, „*Erziehung zum Ungehorsam*“, NDR 1969. (テレビ番組)

<sup>53</sup> Bott, Gerhart (Hg.), *Erziehung zum Ungehorsam. Antiautoritäre Kinderläden*, Frankfurt a.M. 1970, S. 119-123.

<sup>54</sup> „*Erziehung zum Ungehorsam*“, in: *Hamburger Abendblatt*, 2. Dez. 1969.

<sup>55</sup> „Diese Woche“, in: *Der Spiegel*, Nr. 50, 7. Dez. 1969.

<sup>56</sup> „*Kinderschule der Monika Seifert*“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>57</sup> Seifert, Zur Theorie der antiautoritären Kindergärten, S. 14.

<sup>58</sup> Bott (Hg.), a.a.O., S. 111.

<sup>59</sup> Seifert, *Kinderschule Frankfurt*, S. 168ff.

<sup>60</sup> Aden-Grossmann, Wilma, *Monika Seifert. Pädagogin der antiautoritären Erziehung. Eine Biographie*, Frankfurt a.M. 2014, S. 83.

<sup>61</sup> Seifert, Zur Theorie der antiautoritären Kindergärten, S. 25.

<sup>62</sup> „Die Kinder stammen aus Akademikerfamilien“, in: *KL-Info*, Nr. 4, 12. Febr. 1969, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger), 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>63</sup> „Vorbereitung der Kommunediskussion“, in: *KL-Info*, Nr. 6, 29. März 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>64</sup> Kenen, a.a.O., S. 158.

<sup>65</sup> 井関正久『戦後ドイツの抗議運動—「成熟した市民社会」への模索』岩波書店 2016年 40-41頁。

<sup>66</sup> アドルノ、Th. W. (三光長治訳)『ミニマ・モラリア—傷ついた生活裡の省察』法政大学出版局 2009年 42頁。

<sup>67</sup> Kraushaar, a.a.O., S. 123f.

<sup>68</sup> Breitenreiter, Hille Jan u.a., *Kinderläden. Revolution der Erziehung oder Erziehung zur Revolution?*, Reinbek 1971, S. 25f.

<sup>69</sup> „Kurze Darstellung über die Entwicklung des Aktionsrates der Frauen“, 00000112, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger) 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>70</sup> N.N., *Berliner Kinderläden*, S. 78.

<sup>71</sup> „Kurze Darstellung über die Entwicklung des Aktionsrates der Frauen“, 00000112, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger) 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>72</sup> Ebd.

<sup>73</sup> N.N., *Berliner Kinderläden*, S. 32f.

<sup>74</sup> 中央評議会は、KPD/ML の設立を「ドイツ労働運動の歴史的必然性」として支持し、他の左翼組織は運動の統一を妨げていると非難した。Göddertz, a.a.O., S. 114; Zentralrat der sozialistischen

Kinderläden West-Berlin (Hg.), *Kinder im Kollektiv*. Nr. 5, Berlin 1969, S. XIV. (海)

<sup>75</sup> „2. Entwicklung der theoretisch-praktischen Arbeit im Laden“, in: *KL-Info*, Nr. 6, 29. März 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>76</sup> Breitenreicher u.a., a.a.O., S. 43 u. 47f.

<sup>77</sup> „Von der antiautoritären zur sozialistischen Erziehung (Ergänzung)“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>78</sup> Zentralrat der sozialistischen Kinderläden West-Berlin (Hg.), *Vera Schmidt. 3 Aufsätze*. Nr. 1, Berlin 1969, S. 6f. (海)

<sup>79</sup> N.N., *Berliner Kinderläden*, S. 221.

<sup>80</sup> Zentralrat der sozialistischen Kinderläden West-Berlin (Hg.), *Erziehung und Klassenkampf. Oder deren Geschichte nebst einer relativ vollständigen Bibliographie unterschlagener, verbotener Verbrannter Schriften zur revolutionären sozialistischen Erziehung*. Nr. 3, Berlin 1969, S. V. (海)

<sup>81</sup> „Freiheit zur Onanie bleibt ein bürgerliches Privileg!“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>82</sup> Breitenreicher u.a., a.a.O., S. 51.

<sup>83</sup> „3) Das pädagogische Konzept“, in: *KL-Info*, Nr. 4, 12. Febr. 1969, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger), 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>84</sup> Breitenreicher u.a., a.a.O., S. 53.

<sup>85</sup> „Freiheit zur Onanie bleibt ein bürgerliches Privileg!“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>86</sup> Werder, *Von der antiautoritären*, S. 23f.

<sup>87</sup> Bott (Hg.), a.a.O., S. 11.

<sup>88</sup> „Deutschlands unartigste Kinder“, in: *Stern*, 22. Febr. 1969.

<sup>89</sup> „a) Senatsprotokolle“, in: *KL-Info*, Nr. 6, 29. März 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>90</sup> „Protokoll der Zentralratssitzung v. 15. 3. 69“, in: *KL-Info*, Nr. 6, 29. März 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>91</sup> Breitenreicher u.a., a.a.O., S. 104; Michels, Bernd, „Was heißt eigentlich Kinderladen?“, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger) 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>92</sup> „Systematische Gliederung“, in: *KL-Info*, Nr. 4, 12. Febr. 1969, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger), 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>93</sup> „Protokoll, Sonnabend, 8.2.69, Kinderladen Charlottenburg II, Grunewaldstr. 88, Beginn 21 Uhr 30“, in: *KL-Info*, Nr. 4, 12. Febr. 1969, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger), 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>94</sup> „I. Die Konzeption der Kinderläden“, in: *KL-Info*, Nr. 1, 22. Jan. 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>95</sup> „Erziehung von den Eltern her“, in: *KL-Info*, Nr. 4, 12. Febr. 1969, Bestand Aktionsrat zur Befreiung der Frauen (H. Kröger), 1968/69, 230, APO-Archiv.

<sup>96</sup> „Kinderläden - Arbeiterkinder - Schule“, in: *KL-Info*, Nr. 7, 7. Mai 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>97</sup> Werder, a.a.O., S. 20f; „Zum Info“, in: *KL-Info*, Nr. 1, 22. Jan. 1969, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

<sup>98</sup> Breitenreicher u.a., a.a.O., S. 73.

<sup>99</sup> Werder, a.a.O., S. 18f.

<sup>100</sup> Breitenreicher u.a., a.a.O., S. 76.

<sup>101</sup> „Protokoll der Vollversammlung der Kinderläden“, Bestand Kinder, Jugendhilfe, Erziehung 1969-76, 1064, APO-Archiv.

# Die Frankfurter und Westberliner Kinderläden:

## Eine Analyse zur neuen Kindererziehung in Folge der 68er-Bewegung

Satoshi KAWASAKI

In diesem Artikel geht es um Kinderläden in den späten 1960er-Jahren und frühen 1970er-Jahren. Ein Kinderladen ist ein selbstverwalteter Kindergarten, den die jungen Aktivisten während der 68er-Bewegung konzipiert haben. Mit einem Kinderladen versuchten sie, eigenen Kindern Kindergartenplätze zu verschaffen und eine Alternative zum autoritären Erziehungsstil vorzulegen, der von Disziplin und Gehorsam geprägt war. Damit kann man den Kinderladen als einen Teil des Liberalisierungsprozesses betrachten, der sich seit den 1960er-Jahren in der Bundesrepublik beschleunigt hat. Der Kinderladen war auch ein Teil der alternativen Pädagogik, die sich aus dem wachsenden Bedürfnis der Aktivisten speiste, Kindern offenere zwischenmenschliche Beziehungen und mehr Selbstbestimmtheit zu ermöglichen. Gleichzeitig war der Kinderladen eine politische Bewegung, die vehement eine klassische linke Ideologie vertrat. Manche Aktivisten organisierten ihre Kinderläden als politisch radikale Gruppen und versuchten, ihre Kinder zu überzeugten Sozialisten zu erziehen. Da dieser Seite der Kinderläden bisher wenig Aufmerksamkeit geschenkt worden ist, beschäftigt sich der Artikel mit folgenden Fragen: Wie manifestierte sich der radikal anders gedachte pädagogische Ansatz in der Praxis der Kinderläden? Und wie konnten diese Einrichtungen trotz ihres polarisierenden Konzepts zu einer allgemeinen Pluralisierung der Kindererziehung beitragen?

Die 68er-Bewegung griff die Autonomie des Menschen als eines der wichtigsten Ziele auf. Sie übte Kritik daran, dass Kinder in einem normalen Kindergarten stark unter dem Druck der Erzieher standen und diszipliniert wurden. Sie verweigerte sich außerdem dem traditionellen Bild der Kleinfamilie durch Kritik am Nationalsozialismus, Reflexion über die eigene Erziehung zuhause und den Einfluss der Frankfurter Schule. Die Aktivisten versuchten deshalb, durch das Zusammenleben in einem Kinderladen das Leben in einer traditionellen Kleinfamilie zu überwinden.

Monika Seifert, eine Pädagogin, errichtete im September 1967 in Frankfurt den ersten Kinderladen der Bundesrepublik. Sie bezeichnete ihre pädagogischen Methoden als antiautoritäre Erziehung. Seifert zielte mit Verweisen auf Alexander S. Neill und Wilhelm Reich darauf, Kinder mit drei pädagogischen Prinzipien zu autonomen Persönlichkeiten aufzuziehen: Das erste Prinzip ist, dass Kinder eigene Bedürfnisse selbst regulieren und frei äußern können. Das zweite ist, dass Kinder ohne Schuldgefühle in funktional begründeter Rücksichtnahme aufwachsen können; man müsse auch keineswegs ihre sexuellen Bedürfnisse unterdrücken und verdrängen. Das dritte ist, dass das Lernen der Kinder von ihren Fragen ausgehen muss. Seifert vermied, Kinder dem Druck der Erwachsenen auszusetzen und wollte so verhindern, dass die Kinder zu gehorsamen und autoritären Persönlichkeiten werden.

Im Gegensatz zu Seiferts Konzept waren Kinderläden in Westberlin stark sozialistisch geprägt. Ein Grund dafür lag in den ursprünglichen Motiven, welche die Kommune II und der Aktionsrat für die Befreiung der Frauen besaßen. Die Kommune II zielte darauf, ihre Mitglieder durch kollektiv organisierten Konsum, Arbeit, Freizeit und Kindererziehung als sozialistische Aktivisten auszubilden. Seit dem Sommer 1967 erzogen die Mitglieder ihre Kinder antiautoritär. Der Aktionsrat wurde von frustrierten Feministinnen gegründet, die wegen der Kindererziehung nur wenig Zeit für ihr Studium und die Arbeit in der Studentenbewegung hatten. Der Aktionsrat gründete im Januar 1968 den ersten Kinderladen in Westberlin. Die Kommune II und der Aktionsrat betreuten ab April 1968 gemeinsam ihre Kinder dort. Der Aktionsrat geriet jedoch in Konkurrenz mit dem Zentralrat der sozialistischen Kinderläden, der sich maoistisch orientierte und später die Gunst der Feministinnen errang.

Der Zentralrat forderte, neue pädagogische Methoden zu finden, die den Sozialismus mit der antiautoritären Erziehung kombinierten. Der Zentralrat glaubte, dass die Beseitigung des

Autoritarismus in der Gesellschaft und der Umsturz des Kapitalismus zwei Seiten einer Medaille seien. Er versuchte, die Gemeinschaft des Kinderladens als ein revolutionäres Subjekt zu organisieren und sein pädagogisches Konzept, das die „proletarische Erziehung“ hieß, dort zu verankern. Ziel war es, die Kinder so weit wie möglich antibürgerlich zu erziehen.

Auch in der breiten Öffentlichkeit erlangten die Kinderläden in Frankfurt und Westberlin Bekanntheit. Seiferts Konzept wurde als ein möglicher Gegenvorschlag zur vorherrschenden Erziehung gesehen. Im Gegenzug zu Seiferts Pädagogik stießen die Kinderläden des Zentralrats wegen seiner maoistischen Orientierung auf heftige öffentliche Kritik – diese Entrüstung trug jedoch mit dazu bei, das Konzept des Kinderladens als eine neue pädagogische Institution im öffentlichen Bewusstsein zu verankern.

Eltern, deren Nachwuchs Kinderläden in Frankfurt und Westberlin besuchte, übten jedoch häufig Kritik. Die Gründer der

Kinderläden versuchten, den Erziehungsstil der Eltern ihren pädagogischen Vorstellungen anzupassen. Das stieß auf deren Widerstand und führte zu heftigen Diskussionen über pädagogische Konzepte. Die Gründer mussten schlussendlich den Bedürfnissen der Eltern nach mehr Partizipationsmöglichkeiten an der alltäglichen Gestaltung der Kinderläden entgegenkommen.

Insgesamt waren die Kinderläden eine eindeutige Alternative zur vorherrschenden autoritären Erziehung und trugen zur Pluralisierung und Liberalisierung der Kindererziehung in der Bundesrepublik bei. Die Kinderläden orientierten sich jedoch stark an der Psychoanalyse und dem Maoismus. Außerdem forderten die Gründer der Kinderläden die Eltern auf, sich ihren radikalen pädagogischen Richtlinien zu unterwerfen. Die intensive Auseinandersetzung der Teilnehmer darüber führte zu einer Pluralisierung der Kinderläden und der Kindererziehung im Allgemeinen.